

日本オペラ界の明星

伊庭 孝

本井 康博

(同志社社史資料室)

●同志社と楽壇

同志社は早くから楽壇に逸材を送っている。「歌舞音曲」を嫌ったピュリタン・スクールであったが、例外は「教会音楽」である。たとえば一九三二年の新賛美歌講習会(神田のYMCA)では、前期の講師が津川圭一、由木康、堀内敬三、そして後期が石丸泰郎、大中寅二、内田栄一、伊庭孝である(『東京青年』一九三二年二月号)。後期の四人は青山学

院教諭の石丸以外、同志社出身である。

内田や伊庭は「世俗音楽」でも活躍した。ほかにも青柳有美『同志社を出でし人々』(一九三六年)が先の三人を始め、十三、四人の音楽家を、そして『我等の同志社』(一九三五年)中の竹内不可止「音楽・同志社陣」が二十二人を挙げる。後者の筆頭が伊庭孝である。伊庭は音楽家の肩書きよりも、時には「伊庭想太郎の養子」の方で広く世に知られた。

●伊庭孝とは誰か

伊庭家は剣術家の名門である。とくに想太郎の兄、八郎は小説の主人公になるほど著名である。心形刀流指南、伊庭軍兵衛の長男で「伊庭の小天狗」の異名を取った。鳥羽・伏見の戦に参戦、最後は榎本武揚に従って遊撃隊を率いて箱館に赴き、銃創のため五稜郭で死去した(享年二十七歳)。

弟の想太郎も剣客で、伊庭塾(寄宿舎)を開いて塾生の指導にもあた

った。後に榎本武揚が開いた東京農学校(現東京農業大学)の校長や日本貯蓄銀行頭取をも歴任した。

一九〇一年、東京市教育会の結成に発起人として加わり、東京市議会議長・教育会長の星亨に接近。市議会汚職事件(一九〇〇年)に関する星の言動に憤激して東京市庁で星を刺殺し、無期懲役となった。まもなく五十七歳で小菅監獄で病没した。

伊庭孝は四歳の折に実父の伊庭真(雑誌社経営)が死去したので、翌年

(二八九一年か)「ふた従兄弟」(本家の想太郎の養子となり伊庭塾に引き取られた。養父が星亨を暗殺した時、伊庭は十四歳、中学二年生であった。一九〇三年、養父の獄死に伴い兄の秀栄(大阪高等医学校教授。東大医学部卒の産婦人科医)を頼って大阪江戸堀に転じ、天王寺中学校に転校した。在学中、折口信夫や緒方章(緒方洪庵の孫)らと親交を結び、校友会雑誌『桃蔭』に中学生とは思えぬ端麗な随想を幾編も寄稿した。

●同志社に学ぶ

伊庭は音楽に入れ込み、音楽学校への進学を希望した。が、兄に反対され、伝道師をめざして同志社神学校へ進んだ。『同志社学生名簿』(一九〇六年五月調)の神学校本科第一学級(二人)と翌年の名簿(一九〇七年六月調)の本科二年学級(三人)に名が残る。けれども、一九〇八年五月調の名簿にはすでに名がない。

伊庭は文筆ばかりか話術も得意で、なかでも「説教実習」は担当教員の宮川経輝が感服するほどの好成绩であった。音楽面でも収穫があった。時はグリーククラブの勃興期で、伊庭



「女護ヶ島探険」で探険家を演じる伊庭孝(1918年)(松本克平『日本新劇史』)

より半歳若い片桐哲が渡辺守成や海老沢亮、秋保（速水）藤助、境野周次郎といった美声の神学生と共に盛んに男声合唱に取り組んでいた。伊庭は渡辺とは「特に親しくしていた」（『雨安居荘雑筆』二八九頁）。渡辺とは京都教会（牧野虎次牧師）でも日曜学校教師をとにもする仲であった（『京都教会百年史』二五三頁）。

伊庭は器楽演奏にも巧みで、ヴァイオリン、チェロ、ピアノ、三味線などが操れたという。同志社教員、三輪源造も、「此の頃伊庭孝氏が神学校に在学してゐて、どういふ折であったか、ムーンライト、ソナタを弾いた事があつた」と回想する（『同志社五十年史』三五〇頁）。伊庭は「学生時代から音楽に通じチェロを弾いて演奏会にも出た」との証言もある（堀内敬三『音楽五十年史』三三一頁）。ならば、グリーククラブの伴奏や礼拝の奏樂はお手の物だつたはずである。

●神学から新劇へ

オペレッタを創始した。世に言う「浅草オペラ」の誕生である。新劇から歌劇への転進、それは同時に「音楽を民衆化する事」が畢生の目的、と公言する伊庭（『雨安居荘雑筆』二九頁）の樂壇デビューでもある。「浅草オペラ」を彩る人々には伊庭孝、高木徳子、佐々紅華、藤原義江、田谷力三などがある。とりわけ幕開けは伊庭と高木に負う。爪先で踊るダンスをアメリカで習得して来た高木が「トゥ・ダンサー」として

同志社を中退した理由は定かではない。自身、後年には「神学校で唯物的にならない奴は駄目」と自虐的に放言したりする。

ちなみに『資本論』を完読した高島素之は神学校では伊庭の一年先輩で、やはり中退者である。

中退後、伊庭はしばらく（音楽修行のため）関西にいたようだが、一九一二年に東京へ出た。牧野虎次から警醒社（小崎弘道らが設立したキリスト教系出版社・書店）を紹介された。日曜には同僚とともに靈南坂教会（小崎弘道牧師）に通った（のちに大中寅二が同志社からオルガニストとして同教会に着任する）。ここでも文学サークルを作ったり、クリスマスには自作の劇を演出して周



帝劇バレエの舞姫、高木徳子（1915年）（内山徳十郎『浅草オペラの生活』）

人氣を博した。一九一七年一月二十二日、浅草六区の常盤館で伊庭は彼女を主役に据えて自作（作曲・演出）の喜歌劇「女軍出征」を上演。未曾有の大成功で、連日大入りであった。客の入れ替えもままならず、ついには大道具師が丸太で観客を吊り上げて楽屋口から外へ出すというほどの混雑振りであった。

樂譜もろくに読めない藤原義江を大役に抜擢して周囲を仰天させたのも伊庭である。藤原は一時、藤浦洸

困をびつくりさせた。一方で伝統芸能への関心を深め、歌舞伎座に足を運んだ。演劇への目覚めである。まもなく書店を辞めて同年、『演劇評論』を創刊し、上山草人らと近代劇協会を設立した。新劇の舞台監督、俳優として活躍し始めた。さらにPM公演社も主宰した。

●浅草オペラ

転機は一九一七年に来了。高木徳子や高田雅夫らと歌舞劇協会（「歌舞劇」は伊庭の造語）を設立して創作

（後に作詞家）とともに伊庭宅に居候した。伊庭は藤原のイタリア留学にも尽力し、後年の「われらがテナー」への道を拓いた。代表的な伊庭門下生としてはほかに「日本のタップ王」、中川三郎がいる。

●多彩な音楽著述

「浅草オペラ」は一九二三年九月の関東大震災で忽然と消え去る。一九二五年にラジオ放送が開始されるや伊庭は音楽諮問委員を委嘱され、J O A Kを拠点に近衛秀麿、堀内敬三らとオペラの普及に尽力した。伊庭は座談やスピーチ、講演の巧みさでは定評があつたが、とりわけ放送歌劇の解説は天下一品で、余人の追随を許さなかつた。彼にとつては伝道説教の音楽版であつたに相違ない。気分は音楽伝道師である。

のち関西に転じ、新星歌劇団を主宰したり、生駒歌劇団にも参加した。同団がまもなく解散したために音楽現場を離れ、以後は評論と著述活動



「女軍出征」出演の伊庭孝艦長と高木徳子士官（『浅草オペラの生活』）

に専念した。伊庭は音楽雑誌『白眉』の編集などでオペラ普及に努める一方で、日本の伝統音楽の研究や邦楽の理論化にも取り組んだ。一九二九年には「流行歌は俗悪」と断罪して詩人の西条八十と新聞紙上で論争した。論争の場合、剣客末裔の血が騒ぐのか、論敵を「心形刀流の殺人剣

で撃破」したり（吉本明光の『雨安居莊雑筆』序）、「骨を刺す様な深大な文章」で切り返した（竹内不可止）。著作は約三十冊にも上るが、自身も認めるように主著は『日本音楽概論』（一九二八年）である。千頁にもわたる文字通りの大作で、国際的にも評価が高く、二〇〇一年に同志社



伊庭孝（右）と藤原義江（1927.12.6撮影）（日本オペラ振興会編『日本のオペラ史』）

女子大学のシルヴァン・ギニヤール教授らによりドイツ語に翻訳された。レコード編集をも手がけ、『日本音楽史音盤集』（一九三四年。日本コロムビアから一九七五年に復刻）がある。「学歴を持たない」と告白する伊庭であるが、語学の才に恵まれ、英、独、伊、露のほか梵語まで一通り読めたという。それ

らは訳詩に威力を発揮した。世に知られたものだけでも、「アロハ・オエ」（ハワイ民謡）、「もう飛ぶまいぞこの蝶々」（モーツァルト）、「懐かしの我がケンタッキーの家」（フォスター）、「はるかなるサンタルチア」（E・A・マリオ）、「月光値千金」（ラリー・シェイ）などがある。なかでも最後の曲名は原題（Get out and get under the moon）（一九二八年）の響きさえ活かして秀逸である。日本ではナツキンコールのレコードと「エノケンの月光値千金」で世を風靡した。

一九三七年二月二十五日、腸チフスのため伝研病院で死去した。遺体はいったん自宅（大森区北千束町六〇六）に移され、三月五日に葬儀が芝増上寺で音楽とともに進められた。日本における「音楽葬」の第一号である。『東京日日新聞』（同年二月十七日）には「伊庭は親分肌。記憶力は抜群」との追悼文（増沢武美）が出た。組合教会系の週刊紙『基督教世界』（同年三月四日）も死去を伝

え、「往年天満教会の会員として教会音楽の発展にもつとめ」た、と報じた。事実とすれば、後半生は教会から離れていたのか。

死後、愛弟子の藤浦が直ちに「伊庭孝伝」（『音楽世界』九の四、五、七）の執筆や遺稿集の堀内敬三編『雨安居莊雑筆』（信正社、同年）の編集実務に精魂を傾けた。なお、戦後（一九四八年〜一九五七年）、「伊庭歌劇賞」が制定され、團伊玖磨、藤原義江、森正、清水脩、妹尾河童などに贈られた。

●神学と「世俗音楽」

伊庭を終生、敬慕した藤浦は、実は神学校でも信仰歴でも伊庭の後輩に当たる。藤浦の場合、「詩人牧師」をめざして同志社神学校に入学するが、劇団活動に熱中し過ぎて退学処分をくらった（『朝日人物事典』）。東京へ出て伊庭の指導を受けた後、慶応の仏文に入学。美空ひばりの初期のヒット作を多数作詞したことで知

られ、今では出身地の平戸に記念碑が建つ。藤浦は五十年前の同志社入学を回顧して言う。

「私は神学部に入學していた。この話をする、みんなが笑いだすし、現に、去年、同志社の文化祭「学園祭」で講演した際、そういうと、学生が一斉に笑い出した。笑われても仕方あるまいが、当時はそれ程熱心なクリスチャンであった」（『同志社時報』一六、一九六五年）。

神学と流行歌作詞。これが不釣合いならば、神学と「浅草オペラ」も当然ミスマッチである。「伊庭孝氏が嘗て同志社神学校に在學し、伝教師たらんとした神学生であったことを知ったら、世人は恐らく一驚を喫するだらう」（『同志社を出でし人々』）。



小野喜美子（伊庭夫人）（『日本新劇史』）

《略歴》伊庭 孝（いば・たかし）

（1887.12.1～1937.2.25）

東京神田駿河台で生まれる。父の死後、本家の伊庭想太郎の養子となる。番町小学校、東京府立一中、天王寺中を経て、1906年に同志社神学校に入学するが、1年半で退学。「浅草オペラ」を始め演劇、歌劇、評論、訳詩、著作などに八面六臂の活躍をした。天満、京都、霊南坂の各組合教会に所属。大日本音楽協会（1932年～1941年）常務理事、楽器改良研究会幹事長、日本大学芸術科講師も歴任した。後年は「いば・こう」と自署。享年51歳。夫人は歌劇団員の小野喜美子。

伊庭や藤浦はこの種の戸惑いにたえず直面したはずである。近年の例で言えば、牧師子弟の岡林信康氏が同志社大学神学部中退である。神（神学部）を捨てた形の同氏が「フオークの神様」に祭り上げられるとは、なんたる皮肉か。

※本文中のゴチック活字の人名は『同志社山脈』（晃洋書房）の収録人物。略歴は同書を参照。